

## 歴史は私たちがつくる

標題は朝日新聞 10 月 11 日朝刊の「文化・文芸 2017 衆院選」。リードから一政治劇が繰り広げられる中、衆院選が公示された。内政も外交も日本の結節点となりそうな今回の選挙。歴史の中ではどう位置づけられるだろうか。昭和史に詳しいノンフィクション作家の保阪正康さんに聞いた。

示唆に富む指摘が多いので、抜粋して紹介したい。

憲法 9 条、米国のトランプ政権との関係、北朝鮮への対応、この三つを党の政策としてどうするか、それが争点だと考えます。解散が決まった後、近所の主婦に言われたんです。「今回の争点はトランプ政権を支持するかどうか。世界から試されているのではないですか」と。感性の鋭い人が市井にいます。安倍晋三首相は米国のトランプ大統領に同調し、9 月の国連総会で北朝鮮に対して「対話より圧力」と演説した。今回は、この演説への信任投票にもなります。

昭和 13(1938)年、日本は中国との和平交渉打ち切りの声明を出した。当時の首相近衛文麿(1891~1945)は後に手記『失はれし政治』で「非常な失敗であった」と反省している。政治指導者はこの「政治的遺書」を読むべきです。どんな相手でも交渉の線を残すのは基本。圧力一本やりには、なんの知恵もない。軍事の増強にもつながる危険性を国民は見抜かないといけません。

戦前は「国難」や「非常時」が日常的に使われていた。時代や言葉に対するデリカシーが感じられない。そのうち「非常時」が飛び出すのでは。

政策は部分ではなく、総合的に判断しないとイケない。先日、幼児を連れた人に、「この子が成人するころには徴兵制が復活するのでは」と聞かれた。ことさら「護憲」と言わずとも、普通の生活者が、直感的に平時から戦時へ移行する不安を感じているんですね。政府が戦争の方を向いているなら、少子化対策は国民を消耗品にするため？という問いがなり立つ。戦前のスローガン「産めよ殖やせよ」は、国民を天皇に命を捧げる兵隊として使い捨てにした歴史。でも、戦争指導者の息子たちはあまり死んでいない。特攻隊で死んだ半分以上は軍人ではなく少年兵や学徒兵。軍の指導者に理由を聞いたら「ひとりの軍人を育てるのにいくらかかっていると思うのか」という答えでした。

戦時は平時と違い、人間の命が序列化されるんです。歴史は正直だから、いろんなものが見えてくる。



ほさか・まさやす 1939年  
生まれ。ノンフィクション作家。  
著書に『あの戦争は何だったのか』  
『安倍首相の「歴史観」を問う』など。

問題意識を持つ人は、どこかで自制心が働くと信じたい。有権者も 4～5 割を占める無党派層がバランスをとるでしょう。

心配なのは棄権。現状を肯定、固定することになる。候補者と 100%意見が合わなくても、さしあたり「次善の策」で判断するしかない。

歴史は国家ではなく国民がつくる。我々には知る権利という市民的権利があることを、義務教育で教えるべきです。我々の側から発想を変えないと、社会は変わりません。

(2017 年 10 月 16 日)